うと思って…」――〝役員を引き受けてくれる積極的な人〟と見られたためか、自治会から環境事業協力員に推薦された。ひよどり団地は円海山に至近のため、よそから遊びに来た人が捨てるゴミに悩まされている。そこで、自治会と子供会が協力して〝クリーンデイ〟を設けて、清掃をしていると言う。

子供会は、設立してまだ一年余り、やっと軌道に乗ってきたところだ。小学一年生と二歳の子供がいる金子氏は設立当時から世話役をしている。「役を引き受ける人があまりいないみたいで、ひとつ引き受けるとあれもこれも、という傾向があるようです。子供会の世話役は今六人いるんですが、みんな何かほかの役員を兼ねています」――この六人は積極的な人が多く、活動は楽しいそうだ。小学生の数があまり多くないので、行事には幼児も参加するよう呼びかけている。しかし、自分が役員をやるのがイヤで子どもを活動に出さない人も中にはいるらしい。世話役の中では「六人だけで決めてはいけないので、もっといろんな人の意見を聞こう」と話しあうそうだが、なかなかまわりが乗ってこないのでうまくいかないと言う。

三つの役を引受けて、金子氏は「まわりの人と親しくなれたし、団地の中のことがいろいろとわかった」――そして、活動がなかなか活発にならないことについて「この団地は、私たちみたいに子育ての最中の人ともう子育てが終わった人と年代が極端に分れていてライフサイクルが合わないことがネックになっていると思います。それに、今の子どもは忙しすぎるのか、小学校高学年になるとあまり活動に出て来なくなりますね。子供会の行事も女と子どもばかりで盛りあがりに欠けるんで、大人の男の人にも参加してほしいんですが…。だいたいこの団地は昼間家にいる人が少ないみたいなんです(笑)」と分析してくれた。

インタビューの途中で、隣りに住んで仲よくしているという吉田基子氏が遊びに来て、話に加わってくれた。吉田氏は子育てが終わってから「静けさと緑を求めて、ひっそり暮らそうと思って」この団地に引っ越してきた。自然に恵まれたこの地がとても気に入っているが、団地内の活動には特に加わっていない。「私の方が前から住んでるのに、団地内のことは全部金子さんに聞いています(笑)」

横浜が好きで自然が好き、という吉田氏は、〝よこはまかわを考える会〟の会員である。〝よこはまかわを考える会〟は、その名の通り横浜の川の様々な問題を考えると同時に、自然保護の実践活動を進めている団体である。円海山は大岡川の源流であり、調査やハイキングにきた会員たちが、帰りに吉田氏の家に寄って遊んでいくと言う。「私は、団地の外で活動してるし、友だちは団地の外の人ばかり、団地のことは、みんな金子さんに甘えちゃって…。外での活動を地域に還元してないのが、私の悪いところね」と吉田氏。「でも、それでいいんじゃないのかな。人それぞれで…」と金子氏。世代の違い、立場の違いはあるが、お互いにざっくばらんに話ができて理解しあえる友だちらしい。〝地域〟というワクが違うのだと言うことを、二人が互いに認めあっている。

予定外のハプニングだったが、吉田氏が遊びに来たことは、このインタビューに厚みを加えてくれた。なり手がいない自治会や子供会の役員を悩みながらやっている金子氏と、団地を離れて横浜の自然保護活動に参加する吉田氏とが隣り同士で親しく行き来している姿に〝重層的構造〟のひとつの貴重な結節点が見えた気がした。

●〝ほっぺん〟はまだヨチヨチ歩き
―高野裕美子氏の場合―

〝ほっぺん港南台〟は、今年八月にできたばかり、ホヤホヤのサークルである。メンバーは、〇～二歳児を持つお母さんたち約二十人と赤ちゃんたち。最初くちコミで集まった人のほか、「タウンニュース」九月十一日号などで募集をした。活動は月二回、母と子が一緒に遊んでいる。

十一月七日〝ほっぺん港南台〟の六回目の活動をのぞいてみた。午前十時、集まったお母さんたちが子どもたちと手をつないで「ぞうさん」の歌を歌って、この日のプログラムが始まる。歌って少し体を動かしたら、次はお誕生会。十一月生まれの子にプレゼントが渡される。つづいて赤ちゃん体操とマッサージ。メンバーのひとりがどこかの教室で習ってきたらしい内容を、自分の子どもをモデルにして披露する。マネしてほかのお母さんもやってみるが、イヤがって泣きそうな子もいる。「子どもがイヤがってたら、無理にやらないでくださいね」――和気あいあいという感じで、みんなそれぞれ適当にやっている。それが終わるとみんなで体を動かしながら歌を歌う遊び。〇～二歳の子どもなので、みんなそろって上手に、というわけにはいかない。横の方で一人でオモチャで遊んでいる子もいる。あまりかた苦しく考えず、それぞれのやり方で楽しんでいるようである。

プログラムがひととおり終わると、お母さんたちの座談会が始まった。子どもたちがガヤガヤしている中で、ある人は子どもの手をひきながら、ある人は子どもを抱きながら、口と頭は座談会に参加している。さすがに戦後民主主義の真っ只中で生まれ育った世代――意見を発表することにはみんな慣れている。「歌がいつも一回きりで終わってしまって、家に帰ってから子どもと歌おうと思っても覚えられないんです。同じ歌をくりかえしてやってください」「粘土とか、お絵描きとか手を使う遊びを多くしてほしい」「近くに同じくらいの年の子が少ないので、こういう中に入るとどうなんだろうと思って子どもを連れて来てみました」「もっとみんなで情報交換とか、コミュニケーションが深まれば、とてもいいサークルになるんじゃないかしら」――まだできたばかりのサークルなので、参加者が決して受け身でなく会の運営のことをそれぞれの立場で考えている。まだ「本音で語りあう」というところまではいっていないようだが、みんなそれを願っていることが感じられる。

座談会の中でふたつのノートが紹介された。ひとつは「リサイクル情報」。それぞれ欲しいもの、いらなくなったものを書きこんで、お互いに情報を交換する。もうひとつは「ほっぺんつれづれ」という交換ノート。これは、みんなが好きなことを書く。ふたつのノートが文字でいっぱいになるころ、〝ほっぺん〟のお母さんたちのつながりは、強く、あたたかく成長していることだろう。

座談会が終わって解散したあと、代表者の高野裕美子氏（港南台五丁目）にお話を伺った。「前からサークルを作りたいなァと思ってたんです。乳幼児を連れた母親って、出ていく場がないんですよ。遠出するのはたいへんだし、だから、家の近くで子どもと一緒に楽しめる場がほしかったんです」――高野氏は、港南台に住んで四年目。生協活動などを通じて友だちもできたが、サークル活動を通じて友だちが増えれば…、同じ立場の母親同士が集まって少しでも力になれれば…と思っていた。そんな時「サンケイリビング」の紙上で学習研究社のサークル募集の記事に出会ったそうだ。

子ども向けの学習雑誌を発行している学習研究社では「お母さんと子どもが〝学研〟とお友だちになってくれるように」と、地域の乳幼児を持つお母さんたちのサークルをバックアップしている。サークルのメンバーが学研の雑誌を購読することが条件だが、活動は押し着せではない。お母さんたちの手づくりのプログラムで活動を進めるが、教材や遊具などの面で、何かとバックアップして

くれるそうだ。

さて、こうした学研の募集記事を見た高野氏、さっそくくちコミで仲間を集め「タウンニュース」などに記事を出し、見事に学研のバックアップを取りつけた。それが〝ほっぺん港南台〟である。

「月千円の会費を集めていますが、そのうち六百円が雑誌代。でも、プリントのコピーとかいろいろ面倒を見てもらうので助かってます。企業のバックアップがあるのはありがたいですね」

とは言っても〝ほっぺん港南台〟の活動は「企業ベッタリ」ではない。次回は、区役所市民課を通じて紹介してもらったお母さんたちの人形劇グループを招いて、みんなで人形劇を見ることになっている。また来年の正月にはタコあげ大会を企画し、市民局青少年課による助成（三十歳以下の若者によるイベントや活動が対象）を受けるべく現在申請中と言う。利用できるものは何でも利用するネアカでしたたかな〝現代っ子ママ〟は「私、公共施設に出入りしたりそういうパンフレットを集めたりするの好きなんです。あっ、これも利用できそう、とか言って。だって税金払ってるんだから利用しなきゃソンでしょ」と言って明るく笑う。

実際、高野氏は乳幼児を持つ母親に関する情報については、区民相談室顔負けの情報通である。「育児相談情報とか幼児教育情報とか自分なりにまとめて…。私はみんなに情報を伝える受け渡し役。そういうことが好きなんです」〝情報誌世代〟のリーダーシップここにあり、という感じ。〝ほっぺん〟でもくちコミでいろいろな情報交換をしたいと言う。これからの幼稚園選びや医療機関のことなど、身近に情報を取りあえる場にしたいそうだ。「将来は文庫なんかもやれたらいいナ。それに地域に親しい友だちができれば、イザというとき心強いだろうし…」―地域に〝人の輪〟を作っていくことの大切さ、を高野氏もまた強調する。そのプロセスとして情報を大事にしていることや、企業でも行政でも利用できるものは利用しようという姿勢に〝現代〟を感じることができる。ここが、現代の最も若いお母さんたちによる〝人の輪〟づくりの現場なのである。

〝ほっぺん〟の若いお母さんたちは、これからどのような〝人の輪〟を育てていくのだろうか。今はまだ子どもたちと同じようにヨチヨチ歩きの〝ほっぺん〟の未来に、これからも注目してみたい。

●〝あの頃〟を知ってるヘンな優越感
―鈴木まり子氏の場合―

今回のレポートの最後に「まち1986」にも登場した五十九年度ミス横浜・鈴木まり子氏にインタビューした。鈴木氏はその後、NHK横浜でのアルバイトなどを経験して今春大学を卒業、現在はFM横浜に勤務して、ますます横浜と縁が深くなりつつある。

――お久しぶり。ミス横浜を体験して、港南台に対する見方が変わりましたか？

「うーん…私はめじろ団地に早く入居して昔の港南台を知ってるだけに、港南台ってある種の〝田舎〟だなって思ってたんですね。横浜って言えば、関内周辺とか都会を連想して…。でもミスとして市内を見たら、横浜ってずいぶん田舎がたくさん残ってるんだなってわかったんです。港南台は、よくも悪くも都会になったんだなって…」

――〝よくも悪くも〟をもうちょっと具体的に言うと…

「街が整ってきて便利になったのは〝よい〟ですね。その反面、私たちが子どもの頃は、まわりが空地ばかりで草ぼうぼうでかくれんぼをしたり、すみれの花が咲いてたり…今から思えば〝団地の子〟にしては幸せだったんです。カブトムシを採ったり泥んこになって遊んで…。それが今はゲームコーナーとか洋光台にあるこども科学館とか、人が作ったところでしか遊べないんですね。だから、子どもがあそこで育つとしたら、ちょっとさびしいですね」

――子どもの頃の話、もう少し聞か

せてください。

「私は五年生の秋、十月にめじろ団地に引っ越してきて、開校したばかりの港南台第一小学校に入りました。五年生は三クラスあったんですけど無理矢理三クラスにしたみたいでどの組も二十人ぐらいしかいないんです。でも転校生がどんどん入って最後にはクラスらしくなりました。〝読み〟が深かったんだな、と思いました（笑）」

――佐藤季緒さんと同い年ですよね。

「そうです。彼女の方が私より前からいて、たしかクラスは別だったんだけど、演劇クラブで一緒でした。それで…カベ新聞を作るグループっていうのがあったんですよ。そのグループが毎日順番に誰かのうちに集まったりしていました。みんな寄せ集めのクラスだったんで、そういうのが仲よくなるのに役立ちました」

――団地の中では何か…

「そのうち、めじろの集会所でおけいこごとがいろいろ始まって、バレエを少しやりました。それから、団地の七夕祭りとか夏祭りとかが始まって…。母と一緒に団地の草むしりとか運動会とか、いろいろ参加しましたよ。お祭りは、今でも連合自治会の夏祭りとめじろのお祭りに行かないと気がすまないんです。別に何をするわけでもなくて、グルッと一周回ってアイスクリームかなんか食べれば気がすむんです（笑）」

――お祭りは、何が好きなんですか？

「引っ越してくる前は金魚すくいが好きで…。でもこちらに来てからはそういうのはやらないで、見て歩くだけですね。環境が変わって何となくやりづらかったのか…自分自身がちょうどそういうふうに変化する時期だったのかもしれません」

――中学は、港南台第一中学校ですね。

「はい。新しい学校で、私は結構〝優等生〟で、疲れてました（笑）。それでこれはひどいと思うんですけど（笑）私が入った頃、部活動が始まったんですが、最初運動部しかなかったんです。私は演劇部に入りたいのに演劇部がなくて…それぞれ強制的にどこかに入れって言われて…ああ、新しい学校だからこうなんだなぁ、引っ越さないで前のところの中学に行けば演劇部があったはずなのに―と思って。先生に、作ろう作ろうって言ったんです。私が卒業する直前になって、演劇部ができました。モノを作るのは大変だな、とわかりました（笑）」

――大人になってからは、地域とのつながりって、どうですか？

「大学生のとき、港南台高島屋の上でテニスをやってましたけど…。今は本当に仕事だけの生活で、地域って…ないですね。二十代の独身が入るような活動ってないでしょう。結婚すれば生協とか共同購入とか誘われるんでしょうけど。だからもう、今は仕事だけ。友だちにも義理は欠くし（笑）。でも、勤めるようになって、港南台の駅で中学の友だちなんかによく会うんですよ。学生時代は時間がバラバラだけど、勤めるとだいたい行き帰りの時間が同じになるみたいで。うわー、今どんな仕事してるの？なんて、すぐ駅前の喫茶店に入って話しこんだりとか…」

――今、港南台に〝ふるさと意識〟ってありますか？　あるとしたら、その核は何ですか？

「小学生の頃の友だちに会ったりすると、本当は何年ぶりかって感じなのに、まるでついこの間まで一緒だったみたいに話ができるんです。○○ちゃん、懐かしいね、とかいうのは抜きで、すぐに戻れちゃう。それはなんでかって考えると、私たちは開発の最初の頃から住んで、あの頃の風景を知ってるんです。あの、駅前に何もなくて、ただ空き地だった頃です。みんなが知らない港南台を私たちは知っている。あの頃、あそこはあんなだったよねって。別にだからどうだってことではないんですけど。ただ〝私はいつかこの街を出てくんだからいいや〟っていう気持ではなくなりました。せっかくきれいな街になったんだから、いつまでもきれいであってほしい。そのためにはみんなが気をつかわないと、すぐにゴミゴミした街になっちゃう

んじゃないかなって思います。そう思うのは港南台という街も私自身もいちばん変化する時期にこの街で過ごしたっていうことが大きいと思います。私だけしか知らない港南台っていうものを持ってるっていう…ヘンな優越感がありますね」

鈴木氏はインタビューの最後に〝ヘンな優越感〟と言った。その言葉が印象に残った。大人たちが港南台と出会っていた時期に、子どもたちだって、より瑞々しい感覚でこの街と出会っていたのだ。そのことを彼女なりの言葉で言うと〝ヘンな優越感〟となるのだろう。

鈴木氏の話は多くの部分で佐藤敦子氏や田中恵美子氏の話と重なっている。開発間もない〝あの頃〟に対する誇りを、親の世代も子どもの世代も共有しているのだろう。このレポートではあまり触れなかったが、そのことは、佐藤季緒氏の言葉の端々からも感じられた。

さて、鈴木氏や佐藤季緒氏のこうした〝ふるさと意識〟が、今後どのように港南台という街とかかわっていくかは未知数である。何年か後に彼女たちは、親から与えられた人生でない、自分自身の人生を歩き始めることだろう。そのとき彼女たちが港南台という土地を選ぶかどうかは、わからない。もし選んだとしたら、その後もう一度インタビューしてみたいと思うが、今は、親の世代の〝出会い〟を子どもの世代もまた共有しているのだということを確認するにとどめたい。

●地域に根づく〝友だちの輪ッ！〟

このレポートは〝人のつながり〟ということに、こだわりすぎたかもしれない。しかし、調査をすればするほど、一番大切なのは〝人のつながり〟だという思いが、ますます強くなる。組織も施設も情報も重要だろう。だが、すぐれた〝人のつながり〟の中で、みんなが自主性を思いきり発揮できるということがなければ、何も始まらないのではないだろうか。

「まち1986」の感想として、いじょうぶ会やひまわりクラブは、結局何をめざしているのかわからない、という人がいた。タテ割り的に目的別に地域を分類しないと気がすまない人は、そう感じるのだろう。だが、ヨコのつながりを重視すればこうした活動こそが生き生きとした地域を作りだす力になっていると思えるのだ。

尾崎氏は「はまかぜ」の編集をする人、佐藤氏は国際交流を進める人、堀氏は日本史を学ぶ人……そんなふうに、目的別に人を定義づけ分類することに、どれほどの意義があるだろう。大切なことは、過去の様々な経験やプライベートなつきあいから自然と生まれてくる、こうした人たちのヨコのつながりなのだ。

かりに、尾崎氏でも佐藤氏でも田中氏でも堀氏でも誰か一人を起点にして「その人の知りあいの知りあい」を残らず網羅したら、おそらく港南台に住む人の半分近くはカバーできるのではないか。「そのまた知りあい」までたどれば九割近い住民の輪ができるに違いない。そうしたネットワークの核になりうるリーダーシップを持った人が何人もいることが、豊かな重層的構造を支える〝地域の財産〟なのだ。

そして、坂本氏や金子氏や高野氏のような若い世代の人たちがそれぞれ試行錯誤をくりかえしながらネットワークの核として互いに育っていくことにより、〝地域の財産〟は未来へ継承されていく。そしてその先には、今はまだ未知数の鈴木氏や佐藤季緒氏が、同じ港南台で育った多くの友人たちとともにいるのだ。

●新興住宅地の地域連帯の条件
港南台の場合から…

最後に、大規模新興住宅地における地域連帯の条件をさぐって〝まとめ〟にしたい。

まず、施設・情報など、地域連帯をめぐる環境面で港南台は比較的恵まれている、ということを再確認しておこう。東京に直結する国鉄・港南台駅を中心にデパート・銀行などが建ち並ぶ駅前は、周辺から人が集

まってくる魅力を持ったショッピング街である。また、済生会横浜市南部病院、港南福祉ホーム（障害者地域活動ホーム）、環境事業局港南工場の余熱利用施設である港南プールと蓬莱荘（老人福祉センター）などは、港南台だけでなく広く港南区全体、横浜市南部地域全体のための施設であるが、もちろん地域活動に利用されることもある。その他、大規模団地には各々集会施設があり、地域全体に公園が計画的に配置され、様々な行事に利用されている。

次に情報の面では「はまかぜ」「タウンニュース」など民間のコミュニティーペーパーの役割に注目すべきだろう。またデパート、スーパー、銀行、外食産業はミニコミ等も含めた情報コーナーや地域の人の写真展・絵画展などにも力を入れている。もちろんこれらは商業ベースで行われているわけだが、コミュニティづくりの戦略として、現行の行政施策よりすぐれている面もある。何か行事をやるにしても、普段つきあいのない役所の行事よりは、三日に一度は行くお店の行事の方が身近で親しみがあるわけだ。

こうした点は、特に新興住宅地においては重要だと思われる。今後も新しい住宅地の街づくりでは、公共施設を適切に配置するとともに、地域と一体になった民間経済（とりわけ第三次産業）の発展を図ることが大切だろう。

施設・情報面で最後に強調したいことは、この恵まれた状況は〝現在の港南台〟のことであって、港南台は初めから恵まれていたわけではない、ということだ。「まち1986」に書いたように、入居が始まったころの港南台は「駅と学校とめじろ団地しかなくて、ポストや街灯さえもなかった」というところなのだ。それが、地域の人々と一緒に発展をとげて今の姿がある、ということを忘れないでほしい。

次に新興住宅地の地域連帯の条件として、地域活動に着目してみよう。

多くの人にとって、地域活動に入っていくキッカケは、PTAや自治会、子供会で「順番で回ってきた」役員の仕事である。これらは大体、「仕方なしに引き受けるもので、あまり面白くはない」という見方をされているが、「やってみたら、いろんな人と知りあえて面白かった」という感想も、かなり一般的なようだ。これは、リーダーやメンバーの人たちの人柄にもよるだろうが、一般につきあいが薄い新興住宅地では「友だちができてよかった」というのは素直な感想ではなかろうか。

こうした新興住宅地はサラリーマン家庭が中心で、長年にわたって自治会・町内会の役員を務める〝顔役〟のような人は少ない。そこで、どこの自治会でもクールに割り切って「役員は順番で」あるいは「クジ引きで」というところが多いようだが、それが結果的には、多くの人に地域と出会うキッカケを与えているらしい。

また、港南台では様々な自主活動が盛んで「自治会活動よりもずっと面白い」と、参加者の評価も高い。しかし、自主活動は文字通り〝自主性〟にもとづいているので、地域に出ていない人がいきなり自主活動にとびこんでいくのは、かなりの勇気が必要ではないか。自主活動の側でも「自治会やPTAなどの役員をやることが、それまで閉じていた自分のカラをやぶるキッカケになる」「自治会やPTAでいろんな人に出会ったり、あるいは自治会活動に参加してみて疑問を持ったりすることが、自主活動の原点になる」という話がある。

こうしてみると、仕方なしにやっている活動にも、好きでやっている活動にも、それぞれいい面があるようだ。必ずしも好きでやっている自主活動だから参加しやすい、ということではなく、全体として、いろいろな参加のチャンスがある、ということが必要なのだろう。

港南台のような新興住宅地には全国各地から様々な人が転入してくるので、物の考え方も好みも人生観も多様である。そうした地域では、地域活動への参加のチャンスも多様であることが大切で「これはよい活動、これはよくない活動」と色分け

して「よい活動」ばかり育てようとすることは、結果的には地域連帯にとってマイナスであろう。

多様な人々が多様な生活課題を抱えて暮らしている。だとしたら、活動もまた多様であることが必要であると同時に、そうしたバラバラの活動をヨコにつないでいく〝人の輪〟こそが本当は一番大切なのだ、という点に、議論は再びもどっていく。

港南台で、この十二年間に見られた動きは、どんな地域にも形を変えて見ることができるはずだ。それを正しく評価することなく、地域の中に入っていって知ろうともせずに、机の上だけで〝地域連帯〟を唱えても、そこからは何も生まれないだろう。それは、新興住宅地だけに限った話ではない。

くり返すが、タテ割り的な発想から見れば価値がないような部分、わかりにくい部分にこそ、豊かな重層的構造を支えていく核心がある。その部分をどう育てていくかが、もっとも大きなポイントと言えるだろう。

<港南区区政推進課区民相談室>